《論　文》

高校生の家庭でのコミュニケーションに関する実証的研究

―茨城県Ｘ高校の調査から―

松田　　哲

A Factual Study of Communication Issues in the Families of High School Students

—From the survey of the X Senior High School in Ibaraki—

Tetsu MATSUDA

キーワード：コミュニケーションスタイル，高校生，保護者
Keywords: Communication style, High School Students, parents

１．はじめに

家庭内でのコミュニケーションは，あらゆる場面で対応するコミュニケーションの基礎となるものである。最近はコミュニケーションというカタカナ表記が一般的になっているが，これまで日本語では「会話」や「対話」という言葉を用いていた。「会話」は相対する相互の間で，交わされるコトバのやりとりであり，コミュニケーションは，定義にもよるが，そのコトバのやりとりの前提として，相手との関係性の構築を目的にしたものとして用いられている感がある。しかしここでは，各用語の定義を吟味するのではなく，そのコミュニケーションの基礎となる家庭内でのコミュニケーションスタイルについて，いくつかの視点に基づいた差異を明らかにするものである。

高校生は発達段階でいえば，青年期の中期にあたり，ハヴィガスト（Havighurst, R, J）による青年期の発達課題では，「両親や他の大人から情緒的に独立すること」や「結婚や家庭生活のための準備をすること」が家族の人間関係に関する項目としてあげられる。しかし，現在の高校生は，全般的に依存性も強く，また精神的にも未成熟な段階であるため，前述の発達課題をクリアしていくことは容易なことではないかもしれない。そこで家庭内でのコミュニケーションスタイルを明らかにすることで，今日的な問題が見えてくるものと思われる。また高校生は第二次反抗期にも相当し，「反抗」「抵抗」「依存」が入り混じって内的葛藤が激しく起こっている時期でもある。

しかし反抗期の段階であっても，家庭内でのコミュニケーションは高校生にとって，居場所

をつくるうえでも，重要な役割を持つものであることは容易に推測される。そのために保護者はどのような取り組みをしているのだろうか。ここでは，家庭内でのコミュニケーションスタイルをカテゴリーの違うグループごとに比較しながら，それらの差異について明らかにしていくことを目的にする。また同時に高校生にとっての，家庭内コミュニケーションの意義と役割について検討していくことにする。

2．調査概要と分析角度の検証

今回の調査は，茨城県内の公立高校であるＸ高校の保護者と生徒を対象に実施した。実施時期は2007年10月，調査サンプルは563票（全保護者の77.2％），調査対象は全学年の保護者であり，調査項目の一部は生徒による回答となっている。

Ｘ高校は，全日制普通科の男女共学校であり，運動系部活動や文科系部活動の活躍もめざましく，文武両道に秀でた高校である。

この調査では以下の３つの観点からコミニケーションスタイルの差異について分析を進めていくものとした。

① 「子どもと話す保護者」と「子どもと話さない保護者」の違い

② 「家庭が楽しい子ども」と「家庭が楽しくない子ども」の違い

③ 「子どもとの関係が良好な保護者」と「子どもとの関係が良好でない保護者」の違い

3．「子どもと話す保護者」と「子どもと話さない保護者」のコミュニケーションスタイルの差異

今回の調査では，家庭での子どもとの会話について，「よく話す」（42％），「どちらかというと話す」（46％），「あまり話さない」（11％），「話さない」（１％）という回答を得ている。これをそれぞれのサンプル数でみると以下のようになる。

「子どもと話す保護者」[「よく話す」（42％）]
……235人

「子どもと話さない保護者」（12％）※
……63人

※12％の内訳は「あまり話さない」（11％），「話さない」（1％）である

まず初めに，上記の切り口でコミュニケーションスタイルの項目を見てみることにする。

両者の家庭ではどのようなコミュニケーショ

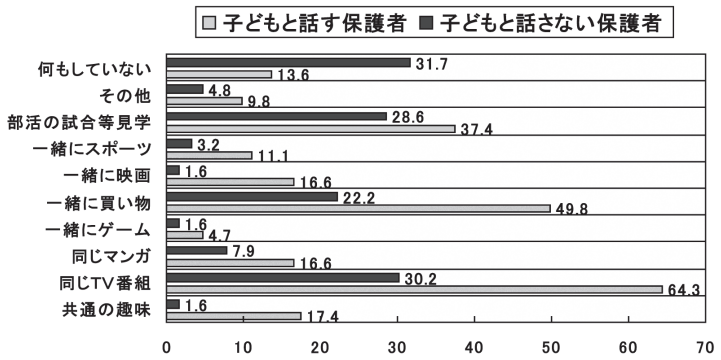

図１　コミュニケーションをとるためにしていること（MA）

ンスタイルの差異がみられるのだろうか。図１は，コミュニケーションをとるためにしていることについての回答である。「子どもと話す保護者」は，どの項目を見ても「子どもと話さない保護者」より選択割合が高くなっている。

「子どもと話さない保護者」が上回っているのは，唯一「何もしていない」（31.7％）だけである。このことは，多くの場面で「子どもと話す保護者」はコミュニケーションが成立し，かつコミュニケーションをとる努力や工夫をしているということになる。

それでは，対面のコミュニケーションに限らず，携帯電話（以下ケータイ）を使った通話やメールによるコミュニケーションはどうであろうか。「子どもと話さない保護者」であっても，ケータイでのメールなどによるコミュニケーションは促進されていることも十分に考えられる。そこで図２はケータイによるコミュニケーションの増減について調べたものである。

この結果を見ると「子どもと話す保護者」も「子どもと話さない保護者」も，ともに「何もかわっていない」が最も多くなっているが，「メールが増えている」（39.1％），「通話が増えている」（8.1％），「対面でのコミュニケーションが増えている」（9.4％）とケータイについても対面でのコミュニケーションについても増加傾向を示しているのは「子どもと話す保護者」の方であった。反対に「子どもと話さない保護者」は「すべて減少」（15.9％）の割合が高くなっている。このことは「子どもと話す保護者」は子どもとの対面コミュニケーションに限らず，ケータイによる通話やメールも含めて幅広いコミュニケーションが促進されているということになる。

次に，子どもとの関係についての回答が図３である。ここでも「子どもと話す保護者」は子

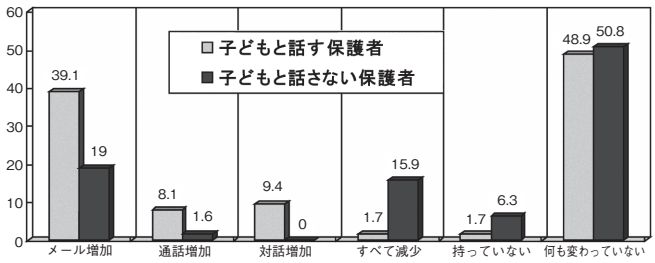

図２　ケータイによるコミュニケーションの増減

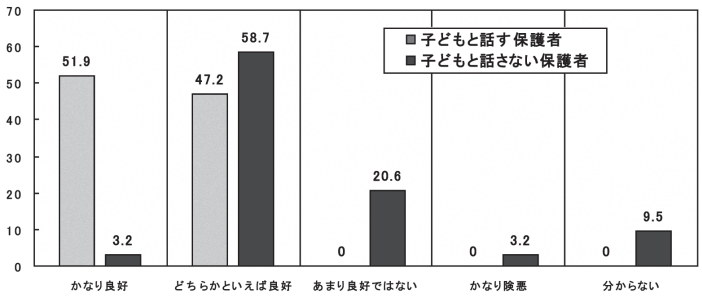

図３　保護者からみた子どもとの関係

どもとの関係を良好であると感じており，「子どもと話さない保護者」は子どもとの関係を良好ではないと感じていることが分かる。保護者にとって子どもとの関係の中でコミュニケーションが取られているかどうかの認識は，親子関係そのものが良好かどうかを判断する大きな指標になっているということである。

最後に，子ども自身が「家庭を楽しい」と思っているかどうかを回答したものが図４である。この項目は生徒自身が回答したものである。これによると「子どもと話す保護者」の子どもは「家庭を楽しい」（「とても楽しい46.8％」，「楽しい39.6％」）と感じており，「子どもと話さない保護者」の子どもは「家庭を楽しい」（「とても楽しい12.7％」，「楽しい42.9％」）と感じている割合が低いことが分かる。さらに「あまり楽しくない」「楽しくない」の割合も合わせて9.5％と約１割を占めている。

以上を見ていくとコミニケーションスタイルについて次のような差異が確認された。

子どもと話す保護者には次のような４つの特徴が見られる。①コミュニケーションを取るために一緒に色々なことに取り組んでいる。②ケータイによるコミュニケーションも活発である。③子どもとの関係も良好だと思っている。④子どもも家庭が楽しいと感じている。

一方，子どもと話さない保護者には次の特徴が見られる。①子どもとのコミュニケーションを積極的に取る場合が少ない。②ケータイによるコミュニケーションも少ない。③子どもとの関係を良好とは思っていない。④子どもは家庭が楽しいという意識が弱い。保護者が子どもと「話している」か「話していない」かの認識は，子どもとの関係を認識する指標でもあり，かつ子ども自身にとっても家庭内での心地よさ（楽しさ）を図る指標になっているということである。

４．「家庭が楽しい子ども」と「家庭が楽しくない子ども」のコミュニケーションスタイルの差異

今回の調査では，保護者に対する設問が多くを占めているが，一部の項目については生徒自身が回答するスタイルになっている。この「あなたは家庭が楽しいですか」の設問は生徒の回答によるものである。この設問に対して「とても楽しい」（33％），「どちらかというと楽しい」（48％），「あまり楽しくない」（6％），「まったく楽しくない」（１％）という回答を得た。

「家庭が楽しい子ども」［「とても楽しい」（33％）］　……173人

「家庭が楽しくない子ども」（7％）※　……35人

※７％の内訳は「あまり楽しくない」（６％），「まったく楽しくない」（１％）である

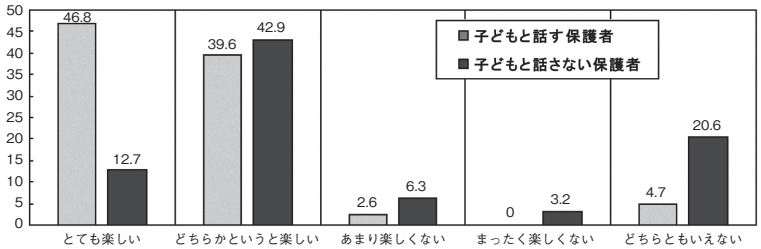

図４　家庭は楽しいか（生徒回答）

ここでは，上記の分類を比較し，「家庭が楽しい子ども」と「家庭が楽しくない子ども」のコミュニケーションスタイルの差異について検討してみることにする。

ここでも両者の割合に開きがあるが，敢えて，いくつかの項目について比較を試みることにする。

まず，最初に親との会話頻度についてまとめたものが図５である。「家庭が楽しい子ども」たちは，保護者と「よく話す」（63.6％）という割合が高くなっているのに対し，「家庭が楽しくない子ども」たちはその割合が17.1％と低くなっている。

保護者との会話時間については，「家庭が楽しい子ども」たちは，「１時間」（42.2％）「2時間」（26.6％）の割合が高くなっているのに対し，「家庭が楽しくない子ども」たちは「30分」（42.9％）「１時間」（51.4％）の割合が高く，会話時間も少なくなっている。

続いて，両者の家庭内でのコミュニケーション内容の違いについて見てみると，図６の結果となった。「家庭が楽しい子ども」たちの方が多い割合を示した項目は，「その日一日の事」（49.1％），「家族」（29.5％），「友だち」（48％），「部活動」（46.2％），「学校・先生」（31.2％）であるのに対して，「家庭が楽しくない子ども」たちが多い割合を示した項目は，「社会・ニュース」（42.9％），「テレビの内容」（28.6％），「特に話すことはない」（2.9％）であった。

普段の会話の内容からも，「家庭が楽しい子ども」たちは，学校や友だちなど子ども自身の身近な話題が多いのに対し，「家庭が楽しくない子ども」たちの家庭では，ニュースやテレビの話題など，子どもの生活にかけ離れた話題が多くなっていた。

またこれらの家庭で親がコミュニケーションをとるためにしていることは，「家庭が楽しい子ども」たちの保護者は，「同じTV番組をみる」（65.9％），「一緒に買い物にいく」（52％），「部活動の試合見学」（41.6％）の順に割合が多いのに対して，「家庭が楽しくない子ども」たちの保護者に多いのは「何もしていない」（28.6％）の項目であり，それ以外はどの項目も「家庭が楽しい子ども」たちの親の方が割合が高くなっている。このことはコミュニケーションをとるために，多くの場面で共有体験を多くしている，もしくは保護者自身もそのような取り組みをしていることが伺える。（図７参照）

さらに，「家庭が楽しい子ども」たちの保護者は，子どもとの関係を「かなり良好だ」（42.8％）と思っているが，「家庭が楽しくない子ども」たちの保護者の割合になると5.7％と

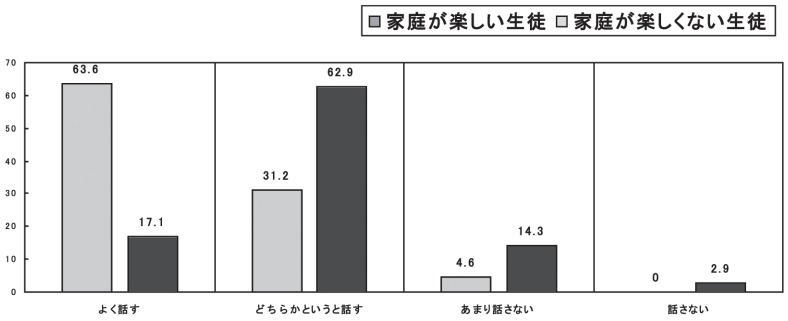

図５　保護者による子どもとの会話頻度

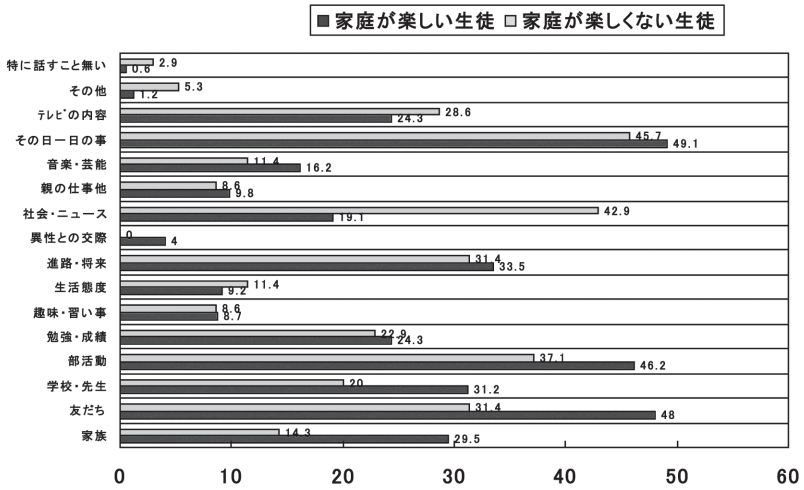

図６　家庭での会話内容（M.A）

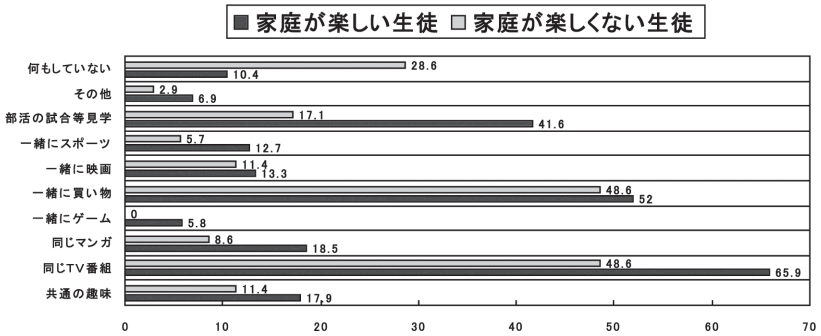

図７　コミュニケーションをとるために保護者がしていること

低い割合になっている。

また，ケータイによるコミュニケーションの増減では，「メール」，「通話」さらに「対話」においても，「家庭が楽しい子ども」たちの家庭の方が増加傾向にあり，「家庭が楽しくない子ども」たちの家庭では，「すべて減少している」や「何も変わっていない」の項目の割合が多くなっている。

次に，Ｘ高校への入学満足度について調べてみた。（図８）ここでの満足度は保護者が思っているものである。これによると，「家庭が楽しい子ども」たちの保護者は「大変満足」（59.5％）「少し満足」（34.7％）であるのに対して，「家庭が楽しくない子ども」たちの保護者は「大変満足」（48.6％）「少し満足」（25.7％）となっている。そして後者は，「不満」（「少し不満」（14.3％）「すごく不満」（2.9％））の割合が，前者よりも多くなっている。

以上を見ていくとコミニケーションスタイルについて次のような差異が確認された。

「家庭が楽しいと感じている子ども」の家庭では次のような６つの特徴が見られる。①保護

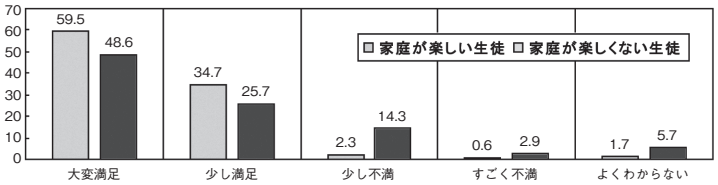

図８　Ｘ高校入学への保護者の満足度

者が家庭の中で子どもと話す時間が多く，かつ多くの場面で会話をしている。②会話内容は，１日の出来事をはじめ家族・友だち・学校の事を話している。③保護者は子どもと一緒に同じＴＶ番組をみたり，買い物や部活動見学など色々なことをしている。④保護者は子どもの関係を良好だと感じている。⑤ケータイによるコミュニケーションも活発である，⑥Ｘ高校入学も満足度が高い保護者が多くなっている。

一方，「家庭が楽しくないと感じている子ども」の家庭では次のような５つの特徴が見られる。①保護者が家庭の中で子どもと話す時間が少なく，会話の場面が限定されている。②会話内容は，社会やニュース・テレビ番組の内容が多くなっている。③子どもの関係を良好だと感じていない保護者が多い。④ケータイによるコミュニケーションも不活発である。⑤Ｘ高校入学に満足度が低い保護者が多くなっている。

５．「子どもとの関係が良好な保護者」と「子どもとの関係が良好でない保護者」のコミュニケーションスタイルの差異

最後に「子どもとの関係が良好な保護者」と「子どもとの関係が良好でない保護者」の違いについてみていくことにする。今回の調査で「子どもとの関係はどうですか」という設問に対して，「かなり良好」(26％)，「どちらといえば良好」(69％)，「あまり良好とはいえない」（３％)，「かなり険悪なほうだ」(0.4％）という回答を得ている。この回答を次のようにカテゴライズして比較を試みた。

「子どもとの関係が良好な保護者」[「かなり良好」(26％)]　……145名

「子どもとの関係が良好でない保護者」(3.4％）※　……20名

※3.4％の内訳は「あまり良好とはいえない」（３％)，「かなり険悪なほうだ」(0.4％）である

子ども関係を認識する指標はコミュニケーションの頻度であろう。この両者に対するコミュニケーションの頻度は図９の通りである。「子どもとの関係が良好な保護者」は子どもとのコミュニケーションの頻度が多くなっているが，「子どもとの関係が良好でない保護者」は反対にコミュニケーション頻度が低くなっている。

実際に１日の会話時間をみても，前者は「30分くらい」(16％)，「１時間くらい」(45.5％)，「２～３時間くらい」(29.7％)，「４～５時間くらい」(4.8％)，「５時間以上」(2.8％）であるのに対して，後者は「30分くらい」(90％）が最も多く，「１時間くらい」(10％）ですべてである。

さらに興味深いのは，図６でとりあげた家庭内での会話内容である。「子どもとの関係が良好な保護者」の家庭では，前述３の「家庭が

楽しい子ども」の家庭と同じように，「その日一日の事」（55.9％）が最も多く，次いで「部活動」（47.6％），「友だち」（49％），「学校・先生」（40％），「家族」（30.3％）であった。それに対して，「子どもとの関係が良好でない保護者」が多い割合を示した項目は，「部活動」（65％）が最も多く，「勉強・成績」（40％）「友だち」（30％）の順であり，その他の項目はすべて30％未満であった。

このことは，「部活動」を介在として，保護者や子どもの意識にズレが生じていることを伺えさせる。部活動における子どもの位置（正選手又は控え選手等）や，その部活動の人間関係や成績等も含めて，その話題はお互いにとって良い話題になったり，反対に悪い話題になっているようである。

次に「子どもとの関係が良好な保護者」と「子どもとの関係が良好でない保護者」の子どもは「家庭を楽しい」と思っているかということについてみていくことにする。

ここでは，図10が示す通り前述３の「子どもと話す保護者」と「子どもと話さない保護者」の時と同じような傾向にあった。これによると「子どもとの関係が良好な保護者」の子どもは「家庭を楽しい」（「とても楽しい51％」，「どちらかというと楽しい34.5％」）と感じており，「子どもとの関係が良好でない保護者」の子どもは「家庭を楽しい」（「とても楽しい10％」，「どちらかというと楽しい25％」）と感じている割合が低いことが分かる。さらに「あまり楽しくない」（５％）「まったく楽しくない」（10％）の割合も合わせて15％となっている。

以上を見ていくとコミニケーションスタイルについて次のような差異が確認された。

「子どもとの関係が良好な保護者」の家庭では，次のような３つの特徴が見られる。①保護者が子どもとよく話し，会話時間が多くなっている。②会話内容は１日の出来事をはじめ，部

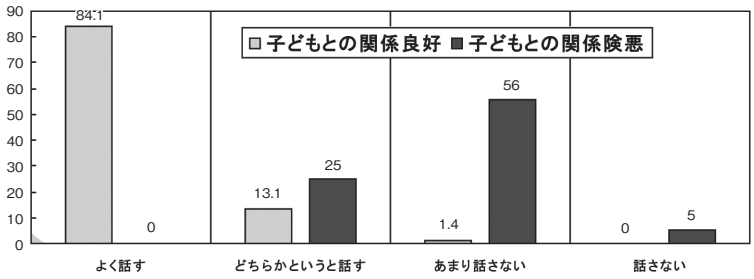

図９　保護者からみた子どもの関係と子どもとの会話頻度

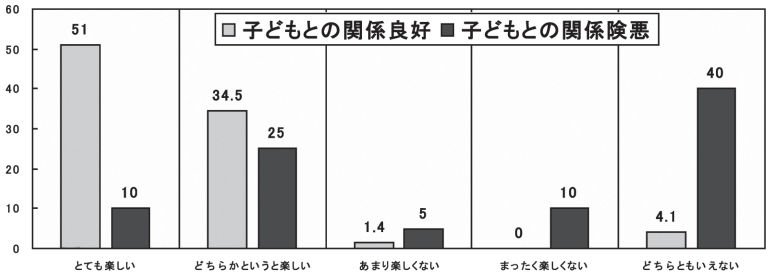

図10　家庭は楽しいか（生徒回答）

活動・家族・友だち・学校の事を話している。③X高校入学も満足度が高い保護者が多く，子どもも家庭が楽しいと感じている者が多くなっている。一方，「子どもとの関係が険悪な保護者」の家庭では次のような3つの特徴が見られる。①保護者と子どもとの会話が少なく，会話時間も短くなっている。②会話の内容は，部活動・勉強・特に話すことがないが多くなっている。③X高校入学も満足度が低い保護者に多く，子どもも家庭が楽しくないと感じているものが多くなっている。

6．調査のまとめと今後の課題

これまでの調査結果から，家庭内でのコミュニケーションスタイルが親と子どもの関係を大きく決定づける要因となっていることが明らかになった。コミュニケーションの促進は，お互いの関係を良好であると認識させ，子ども自身も家庭を楽しいと感じることが多くなっている。またそのためには，コミュニケーションの内容（話題）や場面についても，お互いに多くの共通体験（接点）を持つようにしながら，一日の出来事や学校のことなど，身近なことを話題にしていくことが見受けられた。これらを整理すると次のような傾向になる。①家庭での会話が多い・または会話時間が長いほど，子どもは家庭を楽しいと感じる傾向が強くなる。②家庭でのコミュニケーションの状態が，子どもとの良好な関係を作っている。③コミュニケーションの場面は多く持ち，そのためには一緒に色々なことをする取り組みが必要である。④話の内容は，その日一日の出来事や家庭・友だち・学校のことなど身近な話題が話しやすい傾向にある。

家庭内でのコミュニケーションの促進は，高校生にとって自分の居場所（家庭が楽しい）になっていることが明らかにされた。ここでのコミュニケーション促進は，対面によるコミュニケーションに限らず，メールや通話も含めた幅広いものである。

2009年11月末に文部科学省は全国の小・中・高校生を対象とした「問題行動調査」の結果を発表した。それによると，児童・生徒の暴力行為の発生件数は約6万人（前年比13％増），いじめの認知件数は約8万4千件（前年比16％減）であった。今回の調査では特に小学校での暴力行為が24.3％増と顕著であった。（中学校16.1％増，高校3.3％減）同省では「感情をコントロールできない児童生徒の増加」や「規範意識やコミュニケーション能力の低下」などを増加の背景として指摘している。特に後者の「規範意識やコミュニケーション能力の低下」は教育現場からもよく聴かれるものである。このようなコミュニケーションの基本は家庭で培われるものであり，家庭内でのコミュニケーションが促進される状況にあるのか，または阻害される状況にあるのかではコミュニケーション能力だけではなく，他者との関係性を構築する能力も低下していくことは明らかである。

今後は，高校生に限らず小学生や中学生など発達段階に応じて，家庭内での関係性やコミュニケーション状況を把握する必要がある。今回の調査でも女子学生は母親とのコミュニケーション機会は多いものの，父親とのそれはかなり低い状況にあった。発達過程の反応でもあるが，保護者（特に父親）と子どもの関係性構築についても検証を進めていく必要がある。また部活動加入者と未加入者によるコミュニケーションスタイルの違いについても明らかにしていく必要があると考えている。

［参考文献］

「青年期問題と家庭ストレス」高橋靖恵『家族のストレス』日本家族心理学会　金子書房　2009
「家庭内コミュニケーション研究の意義と最近の成果」長谷川啓三『家族心理学と現代社会』日本家族心理学会　金子書房　2008
「人間関係とコミユニケーション」 松田　哲　流通経済大学出版会　2006
「コミュニケーション理論が家族心理学にしめる位置」長谷川啓三『家族コミュニケーション』日本家族心理学会　金子書房　2004
『自己理解のための青年心理学』中里至正・松井洋・中村真編著　八千代出版　2004